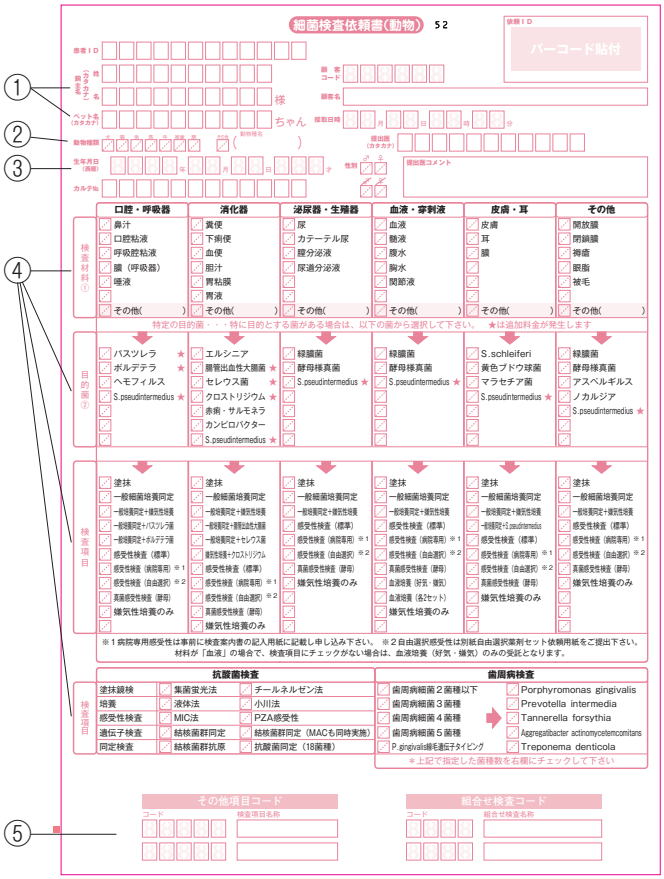
細菌検査依頼書　記入方法



[依頼書の記入要領]

検査依頼書は複写になっておりますので、ボールペンで強くご記入ください。

①飼主名、ペット名は必ずカタカナでご記入ください。

②動物種類は必ず記入ください。

③生年月日は和暦でご記入ください。

④ご依頼項目は、チェック欄に☑をご記入ください。

⑤記載のない項目をご依頼いただくときにご記入ください。

検査材料別容器一覧

専用容器 ＼ 材料	咽頭	鼻腔	糞便	胆汁	尿	尿道分泌物	膣分泌物	胸水	髄液	血液	膿	耳漏	皮膚・爪	嫌気培養	遺伝子	ノロウイルス	歯周病	胃生検組織
糞便用スワブ			●											●		●		
滅菌スピッツ				●	●			●	●		●		●					
スワブ（太い：咽頭用）	●						●					●		●				
スワブ（細い：鼻腔用）		●				●						●		●				
血液培養ボトル										●	血液培養ボトル（有料） 微量採血用ボトル （0.1ml から検査可能） 1 セット：1,000 円（税別）							
シードチューブ（嫌気用）	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●		●				
シードチューブ（ヘリコバクターピロリ）																		●
UTM-RT															●		●	

検体の採取および提出における一般的注意事項

検体を適切に採取するためには、以下の採取方法および取扱方法をご参照のうえ、所定の容器に必要量を採取してください。検体量は、検査実施に必要な量を掲載しております。

検体の採取時期、採取法	・原則、発熱初期、化学療法開始前に採取してください。 ・無菌的に採取してください。 ・症状を考慮し、採取時期を決定してください。 ・病的部位から採取してください。 ・検体はできるだけ多く採取し、乾燥を防いでください。 ・指定された温度にできるだけ速く保存してください。
化学療法中の患者からの採取	・24 時間以上中止して採取してください。 ・中止できない場合は、抗菌薬の血中濃度が最も低下した時期（次回投与直前）に行ってください。
常在菌の混入、消毒薬の混入を避ける	・常在菌混入は起炎菌の推定を困難とします。特に呼吸器材料において、できるだけ唾液の混入を避けて採取してください。 ・消毒薬の検体への混入は、起炎菌の死滅につながりますので避けてください。
検体の乾燥を避ける	・乾燥により多くの微生物は死滅するため、乾燥を避けて提出してください。
嫌気性菌感染症を疑う場合（閉鎖性病巣、悪臭を伴う材料）	・嫌気性培養をご要望の場合は専用容器でご提出ください。 シードチューブ（嫌気用） 嫌気性用カルチャーボトル ※当社専用スワブでも可能です。
検体の室温放置は厳禁冷蔵保存が原則	・検体の室温放置は、菌が増殖し、検査成績を誤って解釈する危険性があります。 ・*Neisseria meningitidis*、赤痢アメーバ、トリコモナスなど低温に弱いものが疑われる場合を除き、検体は必ず冷蔵保存してください。
バイオハザード対策の徹底	・検体は伝染性の病原体を含んでいる可能性があるため、バイオハザードに十分留意願います。 ・検体が漏れることのない密閉できる容器、輸送に耐えられる容器にて検体採取、提出をお願いします。

主要材料の採取方法

1）口腔・気道・呼吸器系材料

喀痰	口腔内常在菌による汚染を防ぐため、できるだけ唾液・鼻粘液の混入は避けるようにしてください。
咽頭液	滅菌綿棒（スワブ）で病変部をよく擦って粘液を採取してください。

2）消化器系材料

糞便	急性期の排出便を採取します。糞便の量は 1g 程度とし、採便容器（キャリーブレアー培地入り）の深部に入れてください。便の状態を含め臨床所見は病原菌検出に大きな手がかりとなりますので、必ずご記入ください。
胆汁	胆管内胆汁（A 胆汁）、胆嚢内胆汁（B 胆汁）、肝内胆汁（C 胆汁）のうち、検査には通常、胆嚢内胆汁（B 胆汁）を培養します。滅菌スピッツ管に 2 ～ 3mℓ 採取してください。

3）泌尿器・生殖器系材料

尿	オスの場合は、陰茎先端部を滅菌水で拭いた後に滅菌ハルンカップ等に取り、直ちに滅菌スピッツ管に入れてください。 メスの場合は、膣等の常在菌汚染があるため、滅菌水を浸したガーゼで数回洗浄します。ガーゼは 1 回ごとに取り替えるように指示してください。尿は滅菌ハルンカップ等に取り、直ちに滅菌スピッツ管に入れてください。 いずれの場合も早朝尿が望ましく、また通常は前半尿を捨て、中間尿を取ります。
生殖器分泌物	オスの場合は、陰茎をしごき、分泌物を採取してください。 メスの場合は、外陰部を消毒した後、膣鏡を用いて滅菌綿棒で後膣内蓋部より採取してください。

4）血液・穿刺液

血液	採取に当たり、採取部位を充分に消毒してください。消毒方法は、70%アルコールで穿刺部位を中心として円を外側に向かい描くよう拭いていきます。乾燥後、ヨードチンキで同様の方法で消毒します。1 分後に注射器で採血します。血液培養用ボトル（レズンボトル好気性菌用、嫌気性菌用）は、予めキャップを取り、ゴム上部を 70%アルコールで消毒します。培養用ボトルへの血液接種量は 1 ボトル当たり 0.1 ～ 5mℓ です。接種後の培養用ボトルは、速やかに提出してください。
髄液	採取に当たっての皮膚の消毒は、血液培養の場合に準じて行ってください。髄液は、血液培養用ボトルに接種後、速やかに提出してください。塗抹検査（クラム染色）が必要な場合は、髄液を滅菌スピッツ管に入れ、提出してください。

5）その他の部位

膿瘍・創傷	皮下組織や粘膜下の閉鎖性膿瘍は、穿刺部位を消毒後注射器で採取し、滅菌スピッツ管に入れてください。嫌気性菌の検査の場合は、注射器で嫌気培養用輸送容器（嫌気ポーターまたはシードチューブ）のゴム栓に刺し、注入します。開放性病巣のものは、化膿巣の周囲を清掃後、滅菌綿棒で膿性部を採取し、指定容器に入れてください。

抗酸菌遺伝子検査の留意点

1）血液混入検体、組織など材料によっては阻害物質により結果が偽陰性になる場合があります。
2）胸水、腹水、髄液、間接液、血液、骨髄液の採取に当たっては、フィブリンの検出防止のため、必ず EDTA を用いで採取してください。ヘパリン Na は使用しないでください。
3）検体は冷蔵保存してください。菌株は室温保存してください。
4）検査結果において「陽性」は、結核菌あるいは MAC の存在を示唆しますが、「陰性」の場合は、必ずしも結核菌あるいは MAC の存在を不定するものではありません。塗抹、培養など他の検査との併用により総合的に診断いただけますよう、お願いいたします。